



南風

第10号

令和5年12月1日発行

<http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp>

〈学校教育目標〉 進んで学ぶ生徒 心豊かな生徒 心身共に健康な生徒

自分の学習方法を思い出しながら散文的に・・・

校長 吉原 誠 士

今の仕事の進め方や学習観に直接的な影響があったという点で、私には忘れてはならない1年がありました。まず、国語の学習方法は小学校4年生の担任の先生から多くの影響を受けました。新たな単元に入ると、初見だったり曖昧あいまいだったりする単語を文章中から拾って国語辞典を引く「意味調べ」からスタートし、その語を使った「文作り」に進みます。この活動により辞書を使うことに躊躇ちゅうちよがなくなり、係り受けにも注意が向くようになった気がします。本文を大きな段落構成で掴んで内容をまとめる「段落調べ」が続き、それによって要約のコツを意識できました。締めくくりは、内容について生徒間で質問を出し合う「問題作り」でした。質問を作る方も応答する側もハードな思考の連続です。自宅には当時のノートが残っていて、「言葉」「要約」「思考」という学習の流れをたどることができます。

中学校の社会科では教科書の内容が「応用的」に出題されるので深い読み込みが求められました。例えば「魏志倭人伝ぎしわじんてん」の5文字は資料集で元の文章にあたることではじめて意味をもつようになるということです。小学校で身につけた要約のポイントを活かしつつ、教科書やノートはもちろん、参考書も動員してまとめを作らなければ追い付きませんでした。指導要領の改訂があって用語・内容の削減が行われてはいますが、思考・表現の際に豊富な知識の活用を求められることに変わりはありません。読むだけで頭に入る人はそう多くはないでしょうし、3年生や高校生なら社会科の復習は後回しにするほど難しくなることを知っていることと思います。自らまとめ、「書く」ことによって頭に刻み込むことが定着に直結する、それに伴って記憶容量が確実に増えるという経験を中学生でできたことは幸せでした。

私が中学で受けたのは「黒板理科」でした。それでも専門教科として理科を選択したのは名物先生への思い出があったからかもしれません。昭和49年入学では偏差値（点数ではない）万能時代で、各教室に45人が詰め込まれて3つの学年がすべて8クラスという物理的な事情もあったでしょう。小・中学校で「必要に迫られ」「求める」ことから学びを出発させ、その姿勢はずっと続いています。就職後も理科室で観察・実験をすべておさらいし、予習に一人過ごすことは何ともありませんでした。数学と英語は「学習の仕方」をついに捕まえられず、手間と暇をかけて「書きまくる」ことで乗り切ることにしかなかったことを少々悔しく思っています。「授業の名人」と呼ばれる本校で出会った教員の姿に憧れをもちます。実技教科の時数は今よりも多く、体験的な場面が多かったのが幸せでした。

さて、私は日曜日に起床すると朝飯までの間、布団の中で百科事典を読んで過ごすような子どもでした。本好きは現在も変わらず、校長室に相当な量の書籍を貯め込んでいます。新本だけではありません。古本に対して紙の質感や独特の匂いを苦手とする人もいますが、私は気にしません。これも自分の学習スタイルの一つです。異動時に重量物が多くなり、置き場の確保に迫られるのが頭痛の種ですが、そんな悩みから逃れるために、生徒には図書館の利用と借り出しを増やすことを奨励し、教職員にも読書や新聞閲覧の時間を捻出、確保するように訴えています。自分の右手中指に残る“ペンだこ”を眺めて、脳細胞は手を動かすことで成長、発達、進化するのだと呟くのは時代にそぐわないのでしょうか。過去の学習へのノスタルジーではなく、改めて脳を意識し、将来を見据えた学習活動を勧め、進めます。